

今週の為替相場見通し(2017年7月3日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		111.13 ~ 112.92	112.50	110.00 ~ 114.00
ユーロ	(ドル)		1.1172 ~ 1.1445	1.1428	1.1200 ~ 1.1600
(1ユーロ=)	(円)		124.48 ~ 128.82	128.39	125.00 ~ 130.00
英ポンド	(ドル)		1.2707 ~ 1.3030	1.3025	1.2900 ~ 1.3050
(1英ポンド=)	(円)	*	141.41 ~ 146.55	146.39	145.00 ~ 147.00
豪ドル	(ドル)		0.7560 ~ 0.7712	0.7689	0.7550 ~ 0.7750
(1豪ドル=)	(円)	*	84.03 ~ 86.54	86.42	85.00 ~ 88.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 鶴田 涼平

(1)今週の予想レンジ: 110.00 ~ 114.00 円

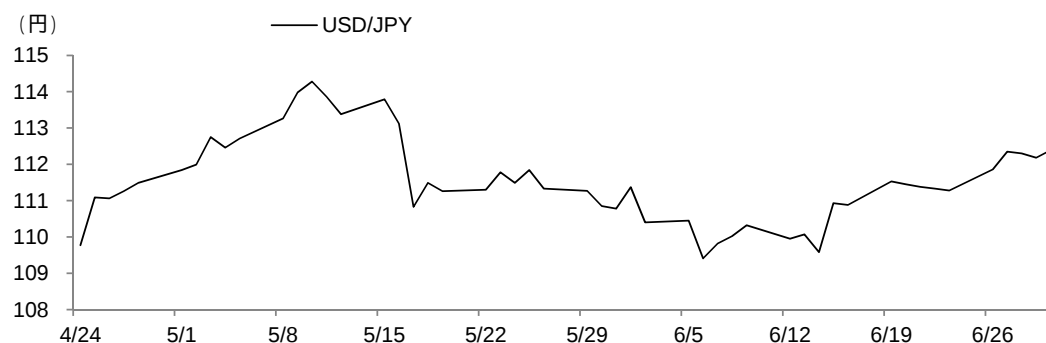
(2)ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週のドル/円相場は堅調に推移。週初26日、シドニー時間に週安値となる111.13円をつけたドル/円は、堅調なアジア・欧州株を背景に111円台後半まで上伸。その後は、米5月耐久財受注の冴えない結果に一時的に下押しされる場面もみられたが、堅調な米株を背景に112円付近まで上昇。27日もドル買い優勢地合いが続く中でドル/円は一時112円ちょうどを上抜けるも、この水準では本邦実需勢による円買いの動きが散見される中で111円台前半まで下落。しかし、ドラギECB総裁による「ECBは政策手段のパラメーターを調整することで景気回復に対応することが可能」とのタカ派発言を背景にユーロ/円が急騰すると、ドル/円も112円台半ば近辺まで急伸。四半期末のスポット末日に当たる28日は、本邦実需勢の円買いフローが見られる中でドル/円はじり安の展開。前日のドラギ総裁によるタカ派発言をECB関係者が否定するとドル/円は一時112円割れまで軟化するも、カーニー・イングランド銀行(中央銀行、BOE)総裁の緩和策縮小を示唆する発言を背景に英ポンド/円が急騰、ドル/円も112円台前半まで連れ高となった。29日は米1~3月期GDP(3次速報)が上方修正されると米金利が上昇、ドル/円は一時週高値となる112.92円まで上伸。しかし、軟調な米株が下げ幅を拡大させると、111円台後半まで急落。30日は、日経平均株価が軟調推移する中でドル/円は112円ちょうどをはさんで上値重く推移。米5月個人消費などの米経済指標が冴えない内容となるも、堅調な米株や原油価格背景にドル/円は112.60円付近まで上昇し、結局112円台半ばで越過となった。

今週のドル/円相場は上値の重い展開を予想する。英総選挙やFOMCなどの注目イベントを通過し、市場にやや材料出尽くし感が漂う中でドル/円は方向感に欠ける展開が続いている。今週は3日(月)に米6月ISM製造業景気指数や7日(金)に米6月雇用統計などの主要経済指標の発表が多数予定されており、その内容に反応する相場展開が中心となるだろうが、市場の雰囲気を変えるほどの材料とはならずドル/円相場に方向感が出るイメージはない。足許のインフレ期待が伸び悩む中で米長期金利も低水準での推移が続いており、ヘルスケア法案の議会通過に苦しむトランプ政権に期待することも出来ない状況下、ドルが積極的に買われる展開は考えにくい。また、ECBやBOEに対するタカ派傾斜期待感が俄に高まりを見せる状況もドル相場の重石となるだろう。今週のドル/円は米主要経済指標の内容に一時的に上振れる場面はあっても基本的には上値の重い推移を見込む。

(3)先週までの相場の推移

先週(6/26~6/30)の値動き: 安値 111.13 円 高値 112.92 円 終値 112.50 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

為替営業第二チーム 橋 雄史

(1) 今週の予想レンジ: 1.1200 ~ 1.1600 125.00 ~ 130.00 円

(2) ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週のユーロ相場は、大幅に上昇する展開。週初26日に1.12近辺でオープンしたユーロ/ドルは、欧州株の堅調推移を受けて1.12台前半まで上昇するも、ドラギECB総裁がギリシャの債務問題について懸念を表明したことが材料視され一時週安値1.1172まで下落。27日はドラギ総裁のタカ派的な発言を受けて欧州債利回りが急騰する展開に1.13台半ばまで急伸し、28日もユーロ買いの流れが継続したが、ECB関係者による前日のドラギ総裁の発言は目先の量的緩和縮小を示唆していないとの発言を受け、一時1.13割れまで急落。しかし、カーニー・イングランド銀行(中央銀行、BOE)総裁によるタカ派的な発言を受けて英ポンドが急伸すると、ユーロ/ドルも1.13台後半まで連れ高となった。29日はユーロ買い地合いが継続し1.14を上抜けると、米金利が低下する中で週高値1.1445をつけた。30日は四半期末の調整売りから1.13台後半まで軟化するも、引けにかけては押し目買いから上昇し、1.14台前半で越過した。一方、対円は週初26日に124円台半ばでオープンし、欧州株の上昇やクロス円の上昇にサポートされ125円台にのせる。27日はドラギ総裁のタカ派発言に加え、原油価格や米債利回りが上昇したことでクロス円が上昇すると、ユーロ/円は一時127.48円まで急伸した。28日はドラギ総裁の発言を否定するECB関係者談が報じられたものの、英国の金融緩和縮小期待も高まったことでクロス円が上昇し、ユーロ/円は127円台後半まで上昇。29日は原油価格が一段と上昇を見せたことでドル/円が堅調に推移し、ユーロ/円は週高値128.82円まで上昇。30日は株式市場が軟調推移となったことや期末にからむポジション調整が入ったことで、ユーロ/円は一時127円台まで下落するが、押し目買い需要も相応にみられ、再び128円台半ばまで上昇して週を引けた。

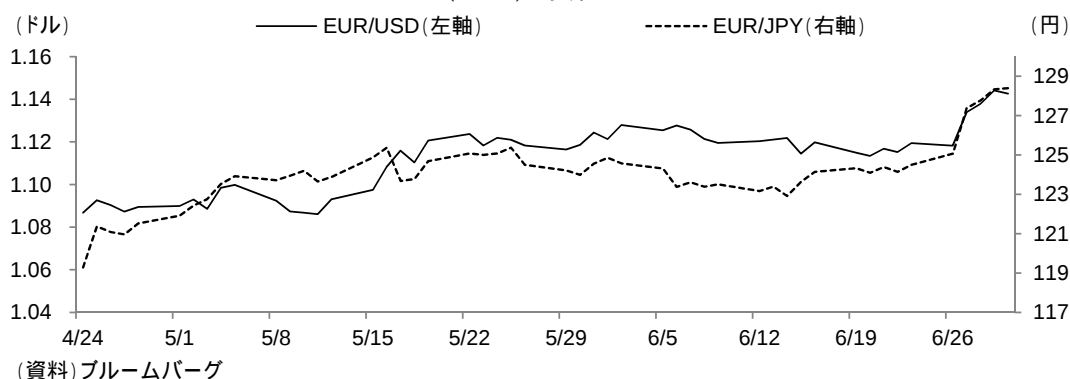
今週のユーロ相場は底堅い展開を予想するも、上値は限定的とみる。先週のユーロ相場はドラギECB総裁が「デフレ圧力はリフレの力に置き換わった」と発言したことをきっかけに、ECBの早期緩和縮小期待が俄かに高まり、欧州債利回りが上昇を見せる中、ユーロ/ドルは上昇となった。また英国やカナダでも同様の緩和縮小を示唆するような発言も見られ、ユーロ相場は対円でも底堅く推移した。これまで先進国の金融政策は米国の単独利上げ状態となっていたが、ここへ来て欧米各国も緩和縮小方面に舵を切る可能性が高まったことで、次回7月20日のECB理事会にて緩和縮小のヒントが示されるのが注目が集まる。たしかにユーロ圏の経済指標は底堅く推移し、仏大統領選を無難に通過し政治リスクが大きく後退したことで景況感も改善傾向にあるが、インフレ指数は目標とする+2%に到達しておらず緩和縮小を一边倒に期待しすぎることは注意が必要であろう。ドラギ総裁からは低インフレは「一時的」との発言がみられ、緩和縮小に踏み切るための地ならしは進んでいるようにみられるが、先週のユーロ相場の上昇は急速に緩和縮小期待が折り込まれすぎた節もあり、巻き戻しも警戒される。今週のユーロ相場は底堅い展開をメインシナリオとしつつも、4日(火)のブラットECB理事の講演、6日(木)のECB理事会議事要旨(6月8日分)には注意をしっかりと払い、慎重なオペレーションで臨みたい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(6/26~6/30)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1172 高値 1.1445 終値 1.1428

(対円) 安値 124.48 高値 128.82 終値 128.39



3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.2900 ~ 1.3050 145.00 ~ 147.00 円

(2) ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週の英ポンド相場は、対ドル、対円で上昇、対ユーロでは下落が先行したがその後反発し、振り返ってほぼ横ばいとなった。主要通貨市場では、金融政策動向が大きく材料視された。米追加利上げや年内の(金融政策目的の)資産保有額縮小が規定路線としてほぼ市場に織り込まれた一方、この間、欧州中銀、英中銀から金融緩和の撤回、利上げを示唆する発言が相次いで聞かれたことが、ドル全面安、ユーロ高、ポンド高の趨勢を作った。27日、欧州中銀ドラギ総裁は「物価を抑圧する要因は全体として一時的」「デフレ圧力はリフレ圧力に置き換わりつつある」などと述べた。欧州中銀は翌28日に「市場はドラギ総裁の発言を誤解している」と金融緩和撤回を示唆する発言との見方を否定したが、その後週明けまでユーロの堅調は変わらなかった。英中銀からも、カーニー総裁(28日)の「物価上昇に対する許容力にも限界はある」「成長とインフレの補完関係(緩和的な金融政策が成長を促す一方でインフレ圧力を高める)が減じれば(インフレ圧力よりも成長促進力が弱まったら)金融引き締め動く」、ホールデン委員(29日)の「英中銀は利上げを真剣に検討すべき」などといった発言が聞かれた。一連の英中銀首脳発言は、同銀金融行政委員会(FPC)が、27日、商業銀行の資本バッファを従来の(リスク加重資産に対して)0%から0.5%に引き上げ、「見通しに重大な変化がなければ」11月に更に1%に引き上げると発表し、(住宅価格高騰などの)資産バブルの可能性には利上げよりもマクロブルデンシャル政策で対処する=利上げに踏み切る用意はないと読まれた直後だっただけに、意外感をもって受け止められた。その他英国関連では、26日、英保守党に対する北アイルランド民主統一党(DUP)の閣外協力が最終的に合意に至ったが、金融市場が材料視した様子は読み取れなかった。

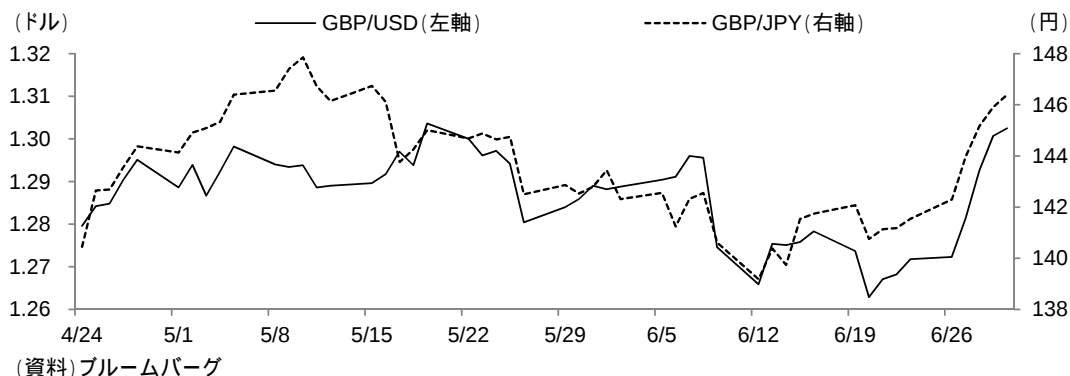
今週の英ポンド相場は、頭打ちから、特に対ユーロで下落を予想。対ドル、対円では方向感のない膠着を予想する。先週の主要通貨市場は、これ以上織り込みようがないほど追加金融引き締めの織り込みが進んだ米と、一向に金融緩和の出口の見えない日本が「負け組」、俄かに金融緩和撤回、利上げの可能性が浮上したユーロ圏、英が「勝ち組」になった格好だが、景気回復を追い風としたユーロ圏の金融緩和撤回圧力の高まりと、ポンド安に強いられる利上げ圧力の強まりとを同列に論じることには違和感を抱く。同じ物価上昇圧力でも、ユーロ圏のは「良い」圧力、英のは「悪い」圧力と言えないだろうか。EU離脱交渉の迷走からくる不透明感が、今後、英経済への投資意欲や英企業の人材採用意欲、英個人の消費意欲などを痛め、経済に減速圧力が掛かる可能性が警戒される現状で、英中銀がおいそれと利上げに動けるとも見込み難いし、そもそも、物価上昇に強いられる利上げが通貨押し上げ要因になるとも思えない。むしろ(成長阻害を通じた)通貨押し下げ要因と受け止められる可能性すら考えられるのではないか。マクロブルデンシャル政策を強化する一方で、俄かに利上げの可能性を騒ぎ立てる英中銀政策運営のちぐはぐさにも不安を覚える。英経済指標などでは、今週、各種6月PMI(3日製造業、4日建設業、5日サービス業)、5月製造業・鉱工業生産や5月貿易収支(7日)などの発表が予定されるが、市場の関心が高いとは思えない。

(3) 先週までの相場の推移

先週(6/26~6/30)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2707 高値 1.3030 終値 1.3025

(対円) 安値 141.41 高値 146.55 終値 146.39



4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.7550 ~ 0.7750 85.00 ~ 88.00 円

(2) ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週の豪ドル相場は上昇する展開となった。週初26日に対ドルで0.75台後半、対円では84円台前半でオープン。対ドル・対円でそれぞれ週安値となる0.7560・84.03円まで値を下げる局面もあったが、その後はアジア株の堅調推移等を背景に豪ドルは底堅い推移となった。金価格の乱高下を受けてやや値を下げたが、その後すぐに0.75台後半を回復した。27日は鉄鉱石価格の上昇等を受けて0.76台前半、対円で85円台前半まで上昇。しかし、その後はドラギECB総裁のタカ派発言をきっかけに欧米金利が上昇すると、ドル買いが強まり対ドルで0.75台後半まで下押しされる展開となった。28日は原油在庫統計の結果を受けて原油価格が上昇したことや株高が進行したこと等を背景に豪ドルは堅調推移となり、対ドルで0.76台後半まで上昇した。29日は豪州株や豪州債利回りの上昇に連れて0.76台後半まで続伸。商品価格の上昇も豪ドル相場をサポートする要因となり、対円では一時週高値となる86.54円まで上昇する展開となった。30日は良好な中国経済指標の結果を受けて豪ドル買いが強まると対ドルで一時週高値となる0.7712まで上昇。その後も高値圏でのみ合い推移が続き、対ドルで0.76台後半、対円では86円台前半で越週した。

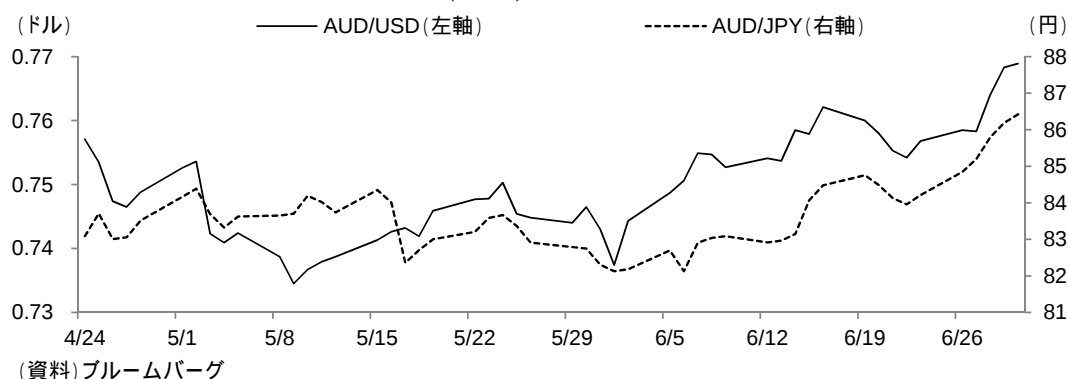
今週の豪ドル相場は方向感に欠ける展開を予想。今週は4日(火)に豪準備銀行(RBA)理事会が予定されている。政策金利の据え置きが予想されており、注目は声明文の内容。足元の豪経済指標では改善の兆しが見られているものの、前回RBA理事会議事要旨では「緩和的な金融政策スタンスの維持が、持続的な経済成長と将来的なインフレ目標達成に整合的と判断した」とされた。海外の各国中銀のタカ派スタンスにRBAも追随すると思惑もあるようだが、RBAがタカ派シフトするまでには一段の指標の改善を待つ必要があると思われる。従って、今回RBA理事会の結果が豪ドル買いをもたらす内容となる可能性は低いと考えている。一方、国外のイベントに目を向けると、米国にて7日(金)の米6月雇用統計をはじめ重要指標の発表が相次ぐ予定となっている。先月のFOMCにおいて示された通りに今後利上げやバランスシート縮小を進めることができるか否かを見極める状況にあり、経済指標の結果に応じて相応に値幅が出ることとなるだろうが、足元でやや米国経済指標に対する警戒感が高まっている状況下、弱い結果となった際のドル売りの方が値幅は出やすく、その場合は豪ドルを押し上げることとなりそう。上記材料に加えて先週豪ドル相場をサポートする要因となった商品価格の動向にも引き続き注意が必要であり、今週の豪ドル相場は神経質な動きとなり明確な方向感の出づらい展開を予想する。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(6/26~6/30)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7560 高値 0.7712 終値 0.7689

(対円) 安値 84.03 高値 86.54 終値 86.42



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。